

[成果情報] **Phomopsis sp.及び Dothiorella sp.によるキウイフルーツ枝枯病（新称）**

[要約] キウイフルーツ樹に発生した *Phomopsis sp.*及び *Dothiorella sp.*による枝枯病を、キウイフルーツ枝枯病と命名した。

[キーワード] キウイフルーツ、枝枯病、*Phomopsis sp.*、*Dothiorella sp.*

[担当] 香川県農業試験場・府中分場・環境担当（病害虫）

[連絡先] 0877-48-0731

[区分] 近畿中四国農業・生産環境（病害虫）

[分類] 技術・参考

[背景・ねらい]

枝枯病の発生は、樹齢が進んだキウイフルーツ樹に多い。枝の大きな切り口、日焼け部を中心に枝枯れ込みが発生し、病勢が進展すると亜主枝、主枝および主幹部まで枯れる。著しい場合は樹全体が枯死することもある。この原因を究明し防除対策の基礎資料とする。

[成果の内容特徴]

- 31 園地、約 150 の枝枯れ部から菌の分離を行うと、*Phomopsis sp.*、*Dothiorella sp.*、*Phoma sp.*、及び *Coniothyrium sp.*等が検出される（*Lasiodiplodia theobromaeo*は検出されない）。
- これら分離された糸状菌の内、*Phomopsis sp.*及び *Dothiorella sp.*をキウイフルーツ樹の枝に接種すると病原性が認められ、再分離される（表1）。
- これらの枝枯菌の形態的特徴（表2）、および生育温度をキウイフルーツ果実軟腐病菌（*Diaporthe sp.*、*Botryosphaeria dothidea*、*Lasiodiplodia theobromaeo*）の *Diaporthe sp.*と *B. dothidea* の不完全世代と比較するとほぼ同一である。また、これらの菌をキウイフルーツの果実に接種すると果実軟腐病と同様の病徴を示す。これらの結果から、本菌は果実軟腐病菌の *B. dothidea* 及び *Diaporthe sp.*と同一菌の可能性が高い。
- 果実軟腐病に有効な薬剤を枝枯病菌に対して薬剤感受性検定すると、ホセチル水和剤、チオファネートメチル水和剤及びフルアジナム等の薬剤が同様に有効である。

[成果の活用面・留意点]

- キウイフルーツ枝枯病の発生生態及び防除対策の基礎資料とする。

[具体的データ]

表1 キウイフルーツ枝枯れ部から分離された糸状菌の病原性

菌名	供試品種	接種方法	供試枝数	接種後出現した症状				再分離 成功数 / 供試数
				枝内部の黒褐変			枝全体の枯死	
				無し	僅か	顕著		
<i>Phomopsis sp.</i>	ハイワード	有傷	3	0	0	2	1	3/3
	香 緑	有傷	4	0	0	2	2	4/4
		無傷	7	7	0	0	0	—
<i>Dothiorella sp.</i>	ハイワード	有傷	3	0	0	2	1	3/3
	香 緑	有傷	3	0	1	1	1	2/2
		無傷	7	7	0	0	0	—

表2 キウイフルーツ枝枯病菌と果実軟腐病菌との形態比較

I. *Phomopsis* sp.

	枝枯病菌	果実軟腐病菌	
		梶谷 (1996)	衣川 (未発表)
分生子 α 胞子	5.2~9.1×2.1~3.9 μm	5.8~10.1×2.1~3.0 μm	6.5~9.1×2.6~3.1 μm
β 胞子	18.2~29.9×1.3~2.6	17.8~33.2×1.2~1.7	20.8~31.2×1.0~1.8
分生子殻	140~600×90~470	—	—

II. *Dothiorella* sp.

	枝枯病菌	果実軟腐病菌	
		梶谷 (1994)	大和 (1997)
分生子	17.7~26.0×5.2~9.1 μm	16.8~29.5×4.9~8.5 μm	13~30×4~8 μm
分生子殻	160~490×120~350	—	80~350×90~300

[その他]

研究課題名 : 難防除・特異発生病害虫の防除技術の開発

予算区分 : 県 単

研究期間 : 1999~2001 年度

研究担当者 : 衣川 勝

研究論文等 : 1)衣川勝・佐藤豊三(2000) 日植病報 66 巻 : 99.

2)衣川勝 (2001) 今月の農業 3月号 :110-115.